

関東学院

# 学院史資料室 ニュース・レター

No.25

2022.3



A.A.ベンネット

横浜外国人墓地に眠る  
関東学院ゆかりの宣教師たちの墓



N.ブラウン



C. B. テンネー の夫人  
グレースと令息ポール



メインゲート(山手門)



C.H.D.フィッシャー



ゴープル夫人

関東学院150周年に向けて  
厳しい時代における  
関東学院の存在意義

## 目次

|                                                           |    |
|-----------------------------------------------------------|----|
| はじめに .....                                                | 2  |
| 関東学院150周年に向けて 関東学院の存在意義 .....                             | 3  |
| 学院の建学の精神を生きた人々 学院150周年に向けて .....                          | 6  |
| ひとりの卒業生として誇りに思う学院へ .....                                  | 9  |
| 「キリスト教人間学インスティテュート」設置に向けて .....                           | 11 |
| 中学関東学院における「福音的キリスト教」の一断面<br>—内村鑑三・高倉徳太郎 等をめぐって— (一) ..... | 14 |
| 寄贈資料の紹介、友井楨先生・編集後記 .....                                  | 16 |

## は じ め に

関東学院 学院長 松田 和憲

『関東学院学院史資料室 ニュース・レター』No.25をお届けできますこと、感謝します。2021年度も2年続けて、コロナに明け、コロナに暮れることとなりましたが、学院では、感染防止の対応に追われ、学校行事、日程、プログラム等の変更を余儀なくされる中、その時々において最善策を講じながら歩んできました。その意味において、前号では、コロナ禍による影響を考慮して、その取り組みや対応策等の関連記事を掲載し、併せて、周年行事の中で、未掲載であった事柄を加えて発刊しました。

いよいよ、本号から「関東学院150周年に向けて」と銘打って、学院の今後の在り方を展望する方向にシフトすることにしました。今年2022年10月で創立138周年を迎えますが、創立150周年まで、あと12～13年とのこと、記念行事、特別プログラムを企画することも大切ですが、それ以上に、学院の今後の展望、方向性を考えることが重要であると考えます。それゆえ本号から創立150周年を視野に入れて、学院の在り方・未来像・展望等について議論を深める小冊子にしたいと願っています。

本誌の内容を短く紹介すれば、まず学院を愛し、学院と共に歩まれた三人の方々に、これから迎える厳しい時代でもなお社会に受け入れられ、必要とされる学院の存在意味を念頭において自由な筆致で書いていただきました。花島光男氏は、長きに亘る中学校高等学校教諭としての経験から、坂田祐先生との出会いや修養会でのエピソードなど、生きた歴史的出来事について記してくださいました。三浦啓治氏は関東学院大学神学部を卒業された後、学院の職員として勤め

た立場からA.A.ベンネット先生、坂田祐先生のこと、セツルメント等についてその歴史を回想的に描いてくださいました。また、山口佳子氏は、女子短期大学を卒業され、長い間、同窓会(香葉会)会長をされ、現在は関東学院監事をされておられる方で、女子短期大学で学んだ積極的意味を踏まえつつ今後の学院のあるべき姿について述べてくださいました。お三方、自らの学院での経験や思い出を携えての叙述になっていますが、いずれも学院に対する熱い思いと期待が込められ、文面から将来の学院に対する提言を読み取ることができ感謝しています。次に2022年4月設置予定の「キリスト教人間学インスティテュート」について、松田が学院長として3回に亘る『WE CAN DO IT!』への紹介文を掲載しました。最後に、前号に引き続き、渡邊茂氏が1926年3月、中学関東学院卒業礼拝の説教者として高倉徳太郎を招いたことの歴史的意義について貴重な資料を基に記述してくださいました。

皆さん多忙な中、寄稿くださったことに感謝し、本誌を皆様のもとにお送りいたします。



建築中の関内キャンパス(撮影：2022年2月1日)

## 関東学院150周年に向けて 関東学院の存在意義

元中学校高等学校教諭、元高等学校定時制課程教頭

関東学院大学キリスト教と文化研究所客員研究員 花鳥 光男

少子化の傾向は今後も続く。私学は厳しい時代に「生き残り」の「競争」が必至である。私学は何を目的に創立したのか、存続する意味は何か、学校の建学の精神を意識し明確にすることが求められる。創立者の教育理念、初期の学校史を通して作られた建学の精神と伝統は、その学校で継続的に語り伝えられ学校の個性、特徴として社会、世間の評価を受けることになる。歴史には明暗があり、史実とは異なって伝説的に語り伝えられることもあり、それも共通意識として伝統となる。しかし客観性を持ち歴史的な検証に耐えうる共通認識が私学の信頼と確信につながる。これは関東学院においても言えることであろう。

学院の歴史を顧みて、見出したこと、また私自身の体験により伝えたい事などから関東学院の建学の精神と伝統を考えてみたい。

関東学院は校訓として「人になれ 奉仕せよ」を1919年の創立時から今日まで生徒、学生に示してきた。坂田祐は創立入学式の時の事を著書『恩寵の生涯』に以下のように記している。

「これは私が祈って上から示された言葉であった。『……諸子は将来学者になり、教育家になり、実業家になり、政治家になり、弁護士になり、医者になり、軍人になり……になるであろうが、何者にかなる前に、先ず人にならなければならない……』と強調した。

次に述べたことは『奉仕せよ』であった。人のために、社会のために、国のために、人類のために尽すことであると力説した。」

時代は第一次世界大戦終戦直後で、アメリカの参戦、ロシア革命、パリ講和会議、朝鮮・中国の民族自決運動等、激変する世界と戦後の新しい時代を意識して示された言葉でもあったと言えるだろう。「人になれ 奉仕せよ」は短い端的な言葉であるが、坂田祐のキリスト信仰に基づく確信の結実で、学院の根本精神として語られてきた。しかし、この校訓は時代の中で「人」とは軍人兵士を意味し、国のために「奉仕せよ」と語られた時もあった。私には神学を語る知識はないが、この言葉は宗教改革者M.ルターの『キリスト者の自由』と

共通すると思っている。

私は一度、坂田祐先生に直接にお会いしたことがある。1968年夏に生徒自由参加の修養会が学院の軽井沢山荘で開催された時で、隣接の坂田祐先生の小さな別荘でお会いした。先生が昔の事を鮮明に記憶しておられることを知った。先生と話したのは、これが最初で最後であった。

関東学院は毎年1月27日に創立記念式をしていた。これは1919年に横浜に開校した時から続けてきた。学院がその歴史を意識したのは1966年の開学80周年記念事業であった。2年遅れたが、1884年横浜バプテスト



軽井沢山荘（坂田夫妻）

神学校の開校を基に学院の歴史を計算したのであった。それは坂田祐が院長を退任し、さらに理事長も退任、そしてアメリカの大学より名誉博士を授与されたことを祝い、さらに白山源三郎氏が理事長に就任したことを記念したのであった。この時、学院歌が作られ、坂田祐の著書『恩寵の生涯』が記念出版された。

この本は坂田祐が東京西荻窪の小さなキリスト教書店である待晨堂が発行する雑誌『待晨』に連載した文章をまとめたもので、一部の読書家以外には知られていない文章であった。当時、学院関係者でも多くは初めて読んだであろう。坂田祐の人生の歩み、軍隊、内村鑑三との出会い、白雨会、関東学院創立などが記されている。その後この本は若干の文章を追加して再編集され『新編 恩寵の生涯』として発行されたが、それでもこの本を知る人は少なかった。坂田祐を知る唯一の本と言えるだろう。近年この本を学院が復刻出版した



『新編 恩寵の生涯』  
復刻版

ことは嬉しく、ありがたいことであった。

1969年11月に関東学院は三春台で創立50周年記念式典を挙行了した。山本太郎校長の時で来賓として県知事、横浜市長も出席した。坂田祐も出席したがこれが公式の場への最後の出席であった。この式典は実際には三春台だけのものであった。

そして翌月16日、坂田祐先生は逝去された。92歳であった。この日の夕方、三春台では、以前よりこの日に予定されていた集会が開催され、そこで関東学院中学校高等学校教職員組合が結成された。組合の結成はその後の関東学院中学校高等学校の運営に大きな影響をもたらすものであった。

1974年、学院理事会は開学90周年記念行事開催の是非について検討するための委員会を組織した。委員は友井篤校長院長代行、片子澤千代松、佐々木敏郎、細川道弘と私であった。学院の歴史知識の乏しい私が任命されたことは片子澤先生の推薦であったと思っている。委員会は開学90周年記念行事の開催は見送り、横浜バプテスト神学校を起源とする創立100年に向けて学院の歴史を検証することを答申した。その後委員会は解散が告げられることも無く、『関東学院百年史』の編纂が始まった。私は編纂委員ではなかったが、中居京先生はじめ多くの先生方からの聞き取り等、様々な場に参加した。『百年史』編纂と併行して、『学院史資料集』が発行され、これは第8集まで続いた。

1984年10月6日、関東学院創立100周年記念式典が釜利谷(現金沢文庫)キャンパスのグラウンドに大きなテントを張り行われた。この年以後学院の創立記念日は10月6日となった。

関東学院の歴史は従来の1919年創立の歴史を35年遡り100年になった。これについては疑問を呈する声もあった。海老坪眞氏は創立100周年記念式当日の神奈川新聞に疑問を投書した。関東学院は坂田祐の創立の精神「人になれ 奉仕せよ」を説く学校であり、前身である横浜バプテスト神学校、東京学院を歴史に加えることは関東学院の建学の精神を変えることになるかと訴えた。

創立100年に合わせて『関東学院百年史』が刊行された。この本の前半、創立より終戦までは片子澤氏の執

筆で、後半は大学以下各校の編纂委員が戦後の新制度による学校新設から現在までの歴史を記している。中高については編纂委員である坂田創氏が昭和20年代を記述し、そのあとは元校長の清水武氏、山本太郎氏の回顧、水野哲太郎校長の現況、海老坪宗教主任の宗教教育の文章のみで、友井篤前校長は文章も名前もない。この『百年史』は1987年、日本基督教学会の雑誌『日本の神学』26号に『同志社百年史』と共に取り上げられ、その編集方法と内容について評価されたが、それは片子澤氏の記述についての評価であると思っている。

『百年史』では学院の創立の歴史を三つの源流と説明した。1884年、横浜で開始されたバプテスト神学校、1895年、東京築地で始まる東京中学院と市ヶ谷佐内坂の東京学院、1919年横浜で始まる関東学院の歴史を束ねて繋いだのであった。学院の歴史には1917年から19年まで、中学校に2年間のブランクがあるが、1927年に東京学院高等部と神学部を吸収合併したことで、高等教育を100年間連続してきたと説明したのであった。

日本には大学より小学校まで多くのキリスト教学校があり、これらをまとめる組織がキリスト教学校教育同盟である。1910年に結成され当初は男子校のみで、基督教教育同盟会と称し、東京学院は創立期からの加盟校であった。日本基督教女子教育会は1913年に組織され初代会長は捜真女学校のカンヴァースであった。両者は1922年に合同した。同盟が組織されたのは宗教教育を禁ずる文部省訓令12号の撤廃を求めて連帯することであったが、同時に、1910年のエディンバラ世界宣教会議による日本のキリスト教総合大学構想を進めることが大きな目的であった。

総合大学構想では特に東京学院と明治学院が積極的に協力推進し、大正学院として発足し、J.F.グレッセツト、C.B.テンネーなどが授業を開始した。しかし他の教派の学校は独自の大学構想を持ち協力体制が出来ず、途中で挫折した。これに対し女子の総合大学は、加盟女子校の財的人的協力により1918年東京女子大学が実現した。

関東学院と坂田祐は基督教教育同盟会の連帯と協力を大切にした。『教育同盟百年史』の「資料編」によると坂田祐は東京学院時代の1917年より3年間、同盟役員として邦文幹事の役職につき、さらに1921年には同盟の総会を関東学院で開催している。その後も1930年さらに1935年以降は継続して理事を担当した。戦争時は

軍の圧迫によりキリスト教主義を廃し、同盟を脱退する学校もあったが、坂田祐の同盟理事は戦時中も続き同盟組織の中核にあって同盟を守ったのであった。戦後も1958年まで、とくに会計理事を担当し退任後は同盟の顧問として生涯同盟との関係をつづけた。同盟顧問になるのは同盟の理事長等の経験者だけであった。

関東学院の歴史を見る時、バプテストミッションの援助と宣教師の働きが、いかに大きなものであるかを知らされる。創立より4年後の関東大震災からの復興に莫大な資金援助があったことを忘れることがなかった。震災後1924年5月より半年間、坂田祐はバプテストの招きでアメリカに資金援助を訴えるために渡米した。アメリカの滞在記録を坂田祐は日記に詳しく記し、バプテストの機関紙『基督教報』に「北米通信」として5回にわたり寄稿している。アメリカではバプテストの大会に出席し、震災の報告と学校復興への支援を訴えた。各地の学校を視察し、大学の夏季講座に参加した。坂田祐はここでアメリカの教会と学校を知ると共に、アメリカの大きさを体験したのであった。戦時中、政府や社会がどれほどアメリカへの敵意を宣伝しても坂田祐の気持ちにはアメリカへの感謝があった。関東学院では創立時より戦時中でも、式典等での祈祷は必ずアメリカバプテストミッションへの感謝の文言があったという。

特に反戦、平和主義で日本での仕事が許されず、フィリピンに行き日本の軍隊に殺されたJ.H.コベル宣教師、戦時中も帰国せず日本に留まり、終戦直後に亡くなったJ.F.グレースット宣教師について、学院はその名前を永久に記憶すべく三春台の校舎にその名前を記念している。

「戦時中、子供が奉安殿として御真影が置かれてある校舎の塔に忍び込み、そこにある箱を秘かに開けて見たら、そこにキチンと畳まれた星条旗があった」と記した文章を読んだ記憶がある。何の文章であるか覚えてないが、あまりにも印象深い文章であった。誰が何に記した文章か、探しているが見つからない。

終戦直後、坂田祐は自宅にあった神棚を、皆が見ている前で叩き壊したと聞いた。戦時中の苦い体験と葛藤への反省と信仰の決意を示したのであろうか。

学院の歴史を知るために坂田祐の日記は不可欠と思っている。坂田祐先生は若い時から日記を記しており、幸いにその殆どが大学の「キリスト教と文化研究所」

に保管され、全てがマイクロフィルムに写されてある。坂田祐先生の私的な日記であるが、記述は院長として学院に関することが圧倒的に多い。更に校長を兼務していた捜真女学校、内村門下の友人関係、教会等と共に、私的な家庭、親族の事もあり、全てを一般に公開することはできない。現在も解読は継続進行中であるが、コロナで中断している。問題は日記を判読し記述の内容を理解、解釈できる人が少ないことである。これは研究所の坂田祐研究グループの緊急の課題である。

関東学院は多くの援助、協力、祈りによって支えられてきた。又率先してキリスト教学校の連帯協力に参加し、「人になれ 奉仕せよ」の校訓をもってキリスト教による人格教育をしてきた。厳しい時代に学校の「生き残り」とか「競争」という言葉が出る時に、関東学院は、まず最初に「学校になれ」と常に自省的に、又積極的にその在り方を問い続ける学校でありたい。

年寄りが子や孫に自らの人生を回顧し語るように、学校は生徒学生に学校の歴史を語るべきである。老人の話が過去の自慢話ばかりでは食傷でしらけてしまう。嬉しく輝かしいこともあったが、苦しく辛く悲しいこともあった。その時どのように生きたかが、昔話の核心であり、人生の深い意味を考えさせ、聞く者の心を打つ。学校の歴史も明暗あり、特に長い歴史を持つ学校は学校の伝統と歴史こそが最大の財産である。組織、学校などは、その歴史にあえて不都合なことは記さないが、人生と同様に光の部分と同時にある陰の部分をも直視しなければならない。苦しい時にどのように歩んできたかを語るのである。校訓を語る時に、同時に校訓を如何に語ってきたかを語るのである。卒業生にとって学校の思い出、記憶は人生の大切な宝物である。学校の伝統、歴史を伝えることが学校の存在の意義である。

#### \*参考文献

- ・『恩寵の生涯』
- ・『関東学院百年史』
- ・『坂田祐と関東学院』
- ・『キリスト教学校教育同盟百年史』
- ・『キリスト教学校教育同盟百年史資料編』
- ・『「坂田 祐 日記」を読む 一解読 坂田創一』

関東学院大学キリスト教と文化研究所

坂田 祐研究会

- ・『物語風 坂田祐見聞録』 海老坪 眞

# 学院の建学の精神を生きた人々 学院150周年に向けて

元学院史資料室 室長 三浦 啓治

## はじめに

学院はキリスト教教育を建学の精神として、「人になれ 奉仕せよ」を校訓として歴史を刻んできた。

学院の歴史は横浜バプテスト神学校を第一の源流とし、第二の源流東京中学院で、のち改称された東京学院、そして第三の源流である中学関東学院に合流して現在に至っている。

この間多くの学院関係者がこの校訓を指針としてその時代の課題に果敢に対応して学院の歴史を創ってきた。

私は学院創立100周年の時には、図書館で開催した資料による関東学院100周年展示会の担当者として、また125周年の時には学院史資料室の担当者として学院の歴史に関わることができた。展示資料の収集を通して、学院の歴史を形成してきた関係者の方々から資料とともに貴重なお話を聞くことができた。

## 横浜バプテスト神学校の建学者

アルバート・アーノルド・ベンネット

第一の源流である横浜バプテスト神学校はA.A.ベンネットによって1884(明治17)年10月に設立された。

ベンネットはアメリカ・バプテスト派の宣教師として、1879(明治12)年に来日した。

翌年から日本の伝道は日本の青年に期待すべきだと、4人の日本人青年に聖書と説教を教え始めた。やがてベンネットは1884(明治17)年3月に京浜地区の宣教師会議において神学校の設立を提案し承認された。そして創立のためにアメリカ・バプテスト宣教本部に援助を申し出たが時期尚早と断られた。このために同僚の宣教師の協力を得て神学校を創立した。

初年度は教師三名、生徒五名からの開校であった。ベンネットは週12時間もの講義と校長としての責務を

果たした。学生は設備的な貧弱さもベンネットの情熱を傾けた指導に満足していた。

ベンネットは学生の



丘の上の二つの建物が横浜バプテスト神学校

指導のためのテキストや研究者としても聖書学関係の著作を多く出版した。また先輩宣教師ネーザン・ブラウンが日本で最初に翻訳した新約聖書の改訂や讃美歌の編纂に携わった。

ベンネットの1896(明治29)年6月の三陸大津波の救済活動は特筆すべきものである。横浜で救済委員会を組織し船で救援物資をもって現地に赴き不眠不休で救援活動を行った。ベンネットが配布した救援品は「粉ミルクは病院で大助かり」、「大部分は漁船に費やされた」と被災者が最も必要としている物資であった。この働きにより明治政府から金杯が贈られ、その金杯は母校のブラウン大学に寄贈した。

ベンネットは1909(明治42)年10月11日神学校創立25年記念式典に出席して祝禱し、翌日に召天し横浜外国人墓地に埋葬された。

墓碑銘にHe lived to serve と刻まれている。

中学関東学院の教師で讃美歌作家の藤本伝吉は讃美歌にベンネットの愛と奉仕に生きた生き方を詠っている。

「みどりの牧場に 我らを臥さしめ いこいの水際に 我らをみちびくそのこえ 神のひとよ、かみのひとよ、みめぐみ永久にあれや」(現行讃美歌213番)

ベンネットは墓碑銘に刻まれているように「彼は仕えるために生きた」(多田貞三 訳)方であり、このベンネットの生き方は文字通り、校訓「人になれ 奉仕せよ」を体現した生涯であった。

## 日本バプテスト青年同盟による東京学院から関東学院への働き

学院の第二の源流である東京学院を発展的に関東学院に繋げるため大きな働きをしたのは日本バプテスト青年同盟である。

日本バプテスト青年同盟は1912(大正1)年12月にバプテストの諸教会の青年たちにより交流と教派の発展のために結成された。

活動の大きな柱として、教派の発展には高等教育機関の拡充を緊急の課題とした。そのために、「第一着手として、東京学院を横浜に移転拡張せん事を要求し」と横浜に移転することを推進することとした。

このために建議書を東京学院理事会とアメリカ外国伝道協会のフランクリン主事に送付し具体的に働きかけた。これに対し学院関係者も理解を示し、また、フ

ランクリン主事も「同校が適当なる改善の結果、近き将来において実現されるように」と、青年同盟の働きに理解を示した。この青年同盟の活動はバプテストの機関紙『教報』に「青年たちが2月1日寒い中、野外で集まり新たな教育機関が実現するための祈祷会を行った。」ことを報じてこの働きを側面から支援していた。

この青年同盟の働きは1919(大正8)年には横浜に中学関東学院、1927(昭和2)年には財団法人関東学院が組織され、東京学院が合併して関東学院高等学部、神学部の開校で実現した。

青年同盟に参加した人たちの中に東京学院、早稲田大学、東京大学、日本バプテスト神学校の学生たちがいた。

この同盟から後に学院やバプテスト教会の指導者になった坂田祐、多田貞三、安村三郎、友井慎、熊野清樹、橋本正三などが参加していた。

坂田祐は1955(昭和30)年の学院創立記念式の式辞で「青年の幻」と題して、この日本バプテスト青年同盟の運動が今日の関東学院を創り上げたと述べている。

#### 校訓の実践者 坂田祐

学院の校訓「人になれ 奉仕せよ」は1919(大正8)年中学関東学院の坂田祐院長が第一回入学式の訓辞の中で述べた。それが学院の校訓となり学院の教育の原点となっている。

坂田は1919(大正8)年に中学関東学院が創設されると院長に就任し、1968(昭和43)年に理事長を退任するまで学院を指導してきた。

坂田は1968(昭和43)年の創立記念日の挨拶の中で在任中に学院が被った三つの大きな試練を乗り越えて今日の学院があることを述べている。

第一の試練は、中学関東学院が関東大震災で東洋一といわれた白亜の校舎をはじめ全施設を失った。

第二の試練は横浜大空襲で学院の多くの施設を失い、坂田も火傷を負った。

第三の試練は施設でなく建学の精神である「キリスト教の精神に基づいて」を削除するよう圧力があり、坂田自身も「最大の難関は軍部の圧力でありました。」と語っているが、この要求に従えば学院の存続の意味がなくなる。この危機に際して坂田は「横浜の憲兵隊へ行って二時間聖書から建学の精神を説明してきたことがあります。」とキリスト教教育を守り抜くことに全力を注いだ。

また、神奈川県当局から、横浜市内にあるキリスト教主義学校に対して、各校の学則にある「本校はキリスト教の精神を以て教育する」の項を削除するよう強要があった。各校長は坂田を中心に県当局と交渉しこれを守り抜いた。戦後、横浜共立学園 神保勝世校長

も坂田の働きに感謝を述べている。

坂田は戦時下の「これらの試練も建学の精神にかたくむすばれておりさえすれば、決して滅びないのです。」と学院は「建学の精神」を基盤として幾多の試練を乗り越えたことを証言している。

#### 学院セツルメントの指導者 渡部一高

1927(昭和2)年に設立された高等学部社会事業科(のちに社会事業部と改称)の実習科目に校訓である「人になれ 奉仕せよ」の実践ともいべきものに「セツルメント」がある。

セツルメントは「本学院創設の主旨を徹底させ、併せて本学院社会事業部学生の実習のために」と、建学の精神である「奉仕せよ」の実践の場でもあった。

学院セツルメントは1928(昭和3)年3月から約10年間行われた。当初南太田の庚耕地、その後神奈川区の浦島町に移転して行われた。

セツルメント活動を指導した渡部一高教授は、浦島町に活動の場を移すとき学生と綿密な社会調査を行い、それに従い活動内容を作成した。

学院セツルメント活動は夜間学校、日曜学校、子供銀行、図書部、遠足、運動会、夏の丹沢でのキャンプ、クリスマス会等、多彩な奉仕活動が行われた。

渡部は子供を対象の活動から地域全体とした。父親には労働問題や社会問題を学習する夜間講座、母親には渡部夫人が婦人会を組織し裁縫や料理講習会、共同購入を行った。また医療部を設け地域の病院と連携し、バザーなどの収益を医療費に充てた。

セツルメントの活動は、「夜学の他合計16種の事業を行っており、実績として毎日の出入延べ人員60～100人がセツルメントに来ている。」と学院に報告されている。

渡部は活動拠点として会館建設を計画した。そのため募金活動を開始、学院関係者、教会、キリスト教主義学校等に働きかけた。さらに、広くセツルメント活動の理解者を得るために「十銭袋」募金を行った。会館は1931(昭和6)年に完成「前進館」と名付けた。

渡部はセツルメントを、建学の精神である「奉仕」を実行できる人物を育成する実習の場とした。



渡部一高教授夫妻と学生

## 学院高等教育の推進者 白山源三郎

白山は学院の高等教育部門を存続・発展させた功労者である。

学院の高等教育部門の社会事業部は1935(昭和10)年に廃止、神学部は1937(昭和12)年に青山学院に併合し、残された高等商業部は1944(昭和19)年に「教育ニ関スル戦時非常時措置方策」により青山学院と共に明治学院に統合された。

高等商業部長の白山は学院に高等部門を存続させるための航空専門学校を設置するために奔走し校長となった。白山は交通論が専攻で、早くから航空輸送が今後の物流の主流を占めると航空交通論の研究者であった。航空専門学校にしたのは学科を工学とすると複数の学科が必要で施設や研究者の確保が不可能であった。そのために「航空工業」と限定した専門学校として認可を得た。

戦後、白山は航空工業専門学校を工業専門学校に転換し、戦時下明治学院に統合された高等商業部を経済専門学校として発足させた。

さらに白山は1949(昭和24)年新制大学として、経済専門学校を経済学部、工業専門学校を工学部とした。

白山は校訓「奉仕せよ」を「先ずもって自らある力なり、資格を具え居て、それを社会の為、他人の為に働かせて、これを益する所に始めて『奉仕』があるのである。」と具体的に奉仕を実行できるためには資格が必要であり、そのための高等教育課程を設置した。

## おわりに

私にとって職員とし校訓を生きた人たちに会えることができたことは幸いなことであった。

なかでも多田貞三先生、渡部一高教授夫人花子氏、村田汎愛先生との出会いで、100周年記念事業としてベンネット夫人の『アルバート・アーノルド・ベンネット その生涯と人物』の出版が計画され、翻訳者として95歳の多田貞三先生に依頼することになった。多田はベンネットが神学校創立25周年記念礼拝でベンネットにお会いし握手したことがあった。多田は中学関東学院の英語教師として学生とともに英文の刊行物を発行し、「英語の関東学院」と言われたほど学院の英語教育の評価を高めた方である。卒業生が多田との交流会を催し、私も一度その日に招かれことがあった。

セツルメント関係では渡部一高夫人花子氏から資料をお借りするためご自宅に伺いお話を伺ったことがある。渡部は戦後も多方面で活躍されたが、晩年いろいろな資料は破棄したがセツルメント関係の資料は大切に保管されていたと言われた。花子夫人もセツルメントに奉仕され、学生を家に招き会食の写真もあった。

白山が戦後、専門学校を新制大学に改組した過程に

ついて、村田汎愛先生にお聞きすることができた。村田は六浦小学校の主事(校長)として学院理事を兼ねていた。理事会では専門学校を改組して新制大学にすることに対して、伝統である中等教育を重視し大学設置に反対する理事も多く、これに対し白山は大学申請の準備作業を進めついに大学設置を成し遂げた。白山の苦勞を村田はつぶさに見てその使命感の強さに尊敬を禁じ得なかったという。

学院の歴史は多くの試練に遭遇してきた。しかし、学院関係者はその都度「人になれ 奉仕せよ」の校訓をその時代の課題に対応し発展してきた。

今後150周年を迎えるにあたって、多くの試練があっても「人になれ 奉仕せよ」の校訓を実践することにより学院のさらなる歴史が形成されるであろう。



前列右より一人目多田貞三、二人目 J.H. コベル、  
四人目渡部一高、後列村田汎愛 (1935.6.10)

## \* 参考資料

- ・『関東学院百年史』
- ・『関東学院の源流を探る』
- ・『関東学院学院史資料室ニュース・レター』 No.9 ~ No.24
- ・『バプテストの横浜地区伝道 1873 ~ 1941』
- ・『A・A・ベンネット研究』
- ・『アルバート・アーノルド・ベンネット その生涯と人物』
- ・『港都横浜の文化論』奉仕に生きた人ベンネット 横浜バプテスト神学校と関東学院
- ・『横浜教会百年史』二代牧師 アルバート・アーノルド・ベンネット
- ・『日本バプテスト青年同盟 記録 第1 大正元年十月起』
- ・『教報』第265号、第270号
- ・『灯火をかかげて—アメリカン・バプテストの宣教師たち』
- ・『バプテストの東京地区伝道 1874 ~ 1940』
- ・『新編 恩寵の生涯』
- ・『坂田祐と関東学院』
- ・『物語風 坂田祐見聞録』
- ・渡部家所蔵「関東学院セツルメント資料」
- ・『追悼 渡部一高先生』
- ・『基督教報』第965号、第976号
- ・「関東学院セツルメント」
- ・『関東学院教育の群像』

## ひとりの卒業生として誇りに思う学院へ

関東学院女子短期大学同窓会 香葉会 会長  
学校法人関東学院監事

山口 佳子

関東学院大学が2023年関内キャンパスを開学し、市中心部への進出を果たすことが、予定されている今、同時に、関東学院女子短期大学が改組になってから20年を経ました。

2003(平成15)年3月18日 関東学院女子短期大学の最後の卒業式が室の木キャンパスで行われ、実質的な閉学となりました。

1946(昭和21)年 関東学院女子専門学校として発足、学制改革により1950(昭和25)年に英文科、家政科からなる短期大学部となり、1966(昭和41)年 国文科が設置され1967(昭和42)年 関東学院女子短期大学と名称を変更し、女子教育に専念する体制となりました。



旧校舎(増築後)

1973(昭和48)年 幼児教育科、1985(昭和60)年 家政科生活文化専攻増設、1987(昭和62)年 経営情報科開設、1994(平成6)年 専攻科食物栄養専攻の開設、そして2002(平成14)年 人間環境学部への改組となり、同時に女子のみの教育は終わりを告げました。

女子教育という枠組みは、なにをもたらしたのでしょうか。どう必要とされたのでしょうか。必要だったのは誰だったのでしょうか。学ぶことに、男女差があってはならないと常に考えるからです。

女子教育とは何か。林淳三先生の著書『関東学院の女子教育－女子短大の存在と私－』2013(平成25)年に発行されました本の中に、「女子教育には女性の特性を助長する機能がある。」の一文がありました。「人間社会には男性と女性が存在していて、両性がそれぞれ役割を果たす共同体である。すなわち、男女は本来、

生理的にも精神的にも相違していて、男性の荒々しさと理性が、女性のやさしさと多感性が協和して社会を構成している。」この“協和”という言葉が、人としての役割は互いが互いを支える存在で、男女の格差を指しているのではないと理解しました。女子短大は女性のエリートを育てた存在として時代の中で十分な意義を持ったと考えています。

そして、閉学後の2万7千人の卒業生に対して、同窓会の活動はどうあるべきかが問われました。33年間同窓会を支えてきた古城房子会長をはじめ、香葉会の役員会、幹事会、年度委員会の多くの方々と話し合いを重ねました。結果“あたたかい同窓会はここにある”として、新たに学校のない関東学院女子短期大学同窓会「香葉会」として歩み始めました。それまでの同窓会を支え続けてくださった方が、同窓会引継ぎ決議の後、言ってくださった言葉が印象的でした。「長い道のりの中で、学んだのはたった2年だったとはいえ、よき学びの場で、よき師、よき友に恵まれたことの幸せを胸に家路へと向かいます。」

関東学院には「関東学院同窓会」という組織があります。中学校高等学校の同窓会「橄欖会」がはじまりで、初代会長は坂田祐先生でした。各校卒業生の結びつきを更に深めようと1966(昭和41)年 関東学院同窓会が設立されました。

この原稿を書いております現在、関東学院小学校「たんぽぽの会」、関東学院六浦小学校「しおん会」、関東学院中学校高等学校「橄欖会」、関東学院六浦中学校・高等学校「六葉会」、関東学院女子短期大学「香葉会」、関東学院大学「燦葉会」、この6会で構成され活動しています。

6会が互いに報告しあうことで、他の学校の活動を知ることができます。卒業生、また在校生へ向けた同窓会の動きを知ることができます。年に1度の総会では、理事長、常務理事、各校の校長先生をお招きし、それぞれの同窓会役員を紹介して交流を深め、法人との懇談会では、同窓会が法人へ望むこと、法人が同窓会に望むことを話す機会となります。

また「関東学院同窓会」からは、関東学院の役員とし

て、理事と監事、評議員が推薦されます。選出された場合は、学院の多くの動向について知り得る場があります。社会の中で経験した、多くの体験や知識を生かしていく場でもあります。これからの未来を託す児童や学生に対する事業計画を知ることができます。

その中で、関東学院女子短期大学改組後20年を迎え「香葉会」は2022(令和4)年12月を20年の節目として解散を予定しております。最後の卒業生は40歳を迎えることになります。名簿への登録人数は1万6千人を数えます。その卒業生たちが、今後とも関東学院の卒業生であることを誇りとして人生を歩んでほしいと望んでいます。

人間のしてきた仕事がAIによってロボットに代わり、専門知識や技術を習得するだけでは通用しない社会が訪れます。地域や社会に接点を持ち、課題を見出す力、情報を整理し解決に導く力、身に着けた知識、技術を活用する力、多様な人々と協働していく力が必要となります。

2019年、2020年にはCOVID-19という感染症が不測の事態を起こし、多くの社会活動を停止させました。多くの命も失われました。この折には関東学院はこの事態に果敢に対処しました。対処に対する方法についての評価は、賛否両論ではありましたが、学院が一つになって動いた事実は、何にも代えがたいことと感じています。思い起こせば2011年東日本大震災時南三陸でのボランティア活動に携わった学生は、大きな衝撃を受けると同時に行動することの大切さを学んだことと思います。現地での活動以外に、学生の神奈川新聞を通じての寄付活動も記憶に残ります。

伝統と歴史は持っているだけで、財産となります。

厳しい時代における関東学院は、今ある優れたものにさらに資源を投入して育てることが大切です。例えば「めっき」技術のように会社を立ち上げ、成功させ、

今も業績を上げています。

更に、こども園から大学院までを備えた学院は、各校の交流を強めることで、あらゆる面からの価値観の変化、急速に進むデジタル化、AIの進歩、データサイエンスによる分析への対応力を持つことができると考えます。そのなかでも、全学でのクリスマスコンサート等は幼いころから、聞いて見ていた楽器を触りたいと思うことで次代へつなぐ感性を呼び起こします。その素晴らしい音こそ関東学院が繋いで、これからもつないでいくものと考えます。



ブラジル、サンパウロ大学に向かう際の壮行会(1981年)  
岡松和夫先生(中央)

大賀ハスの池に吹く風を感じながら、学内を行き来する児童、生徒、学生がこれからの社会を動かしていくと、150周年に思いを馳せています。

#### \*参考資料

- ・『香葉』創刊号 1970年12月25日発行
- ・『関東学院の女子教育－女子短大の存在と私－』  
林淳三著 2013年4月2日発行
- ・『関東学院学報 OLIVE-SPIRIT』



新校舎

## 「キリスト教人間学インスティテュート」設置に向けて

学院の教職員向けに『WE CAN DO IT!』という発行物があります。この発行物は、理事長、学院長等が学院の将来について、今考えていることをメッセージとして発信しているものです。

松田和憲学院長は、2019年7月9日、2020年2月4日、同年9月15日と3回に渡り、2022年度開設予定の「キリスト教人間学インスティテュート」について設置の趣旨、概要、特色、教育および開設に向けての進捗状況等について述べています。

今回はこれら3回分の『WE CAN DO IT!』を本誌に掲載いたします。

学院史資料室事務室

学校法人 関東学院

**WE CAN DO IT!**

学院長 松田 和憲



No.360 2019.7.9

### “キリスト教人間学コース設置に向けて(その1)”

今回は2022年4月、大学の関内キャンパス開設に向け、大学チャプレンが立ち上げを目指して取り組んでいる「キリスト教人間学コース」の概要について説明させて頂き、皆様のご理解とご支援を得たいと願っています。

これは、5年程前、規矩学長から未来ビジョンのプロジェクトとして、キリスト教倫理等を講じる「神学部」を設置する可能性を検討しようと提案したことに端を発します。それを受けて「神学部設置検討委員会」を立ち上げ、3年ほどの年月をかけて、全国の神学部、キリスト教学科を有する主な大学を訪問調査しながら、その可能性について検討してきました。委員会の最終報告によれば、現代の日本における「神学部」設置への関心、ニーズはそう高くはなく、大学として設置運営していくことは困難であるとの結論に達しました。しかし委員会はそのまま解散せず、「神学部」設置の代替案として本学におけるキリスト教教育の充実を図る「副専攻コース」あるいは「インスティテュート」設置の可能性を模索する委員会にシフトさせ、現時点では「キリスト教人間学コース(仮称)」の骨子、コンセプト(案)が固まり、カリキュラム作成に着手する段階に入っています。

ここで、本コースの基本的考え方について説明したいと思います。本コースは、全学の学生を対象とする、

本学の教育理念「キリスト教に基づく教育」を内実化させようとする人間教育プログラムであり、その「ねらい」は、キリスト教思想及び倫理観を土台に据えた人格形成を目指す体系的カリキュラムを提示することによって、人間として自立するための総合力を身に付け、現代社会において責任をもって主体的に生きるための人間力を養い育てようとするにあると言えます。さらには、本コースの主な特色と言えば、以下の3点に集約されます。

#### 1) 校訓「人になれ 奉仕せよ」の内実化を目指す人間教育…

校訓を「道しるべ」として、学生が個の確立を実現するための高次の専門的知識を習得しつつ、社会で生きるために必要なキリスト教の人間理解と価値観を学ぶことによって他者に仕える人間を育てる。

#### 2) 専門的知識を統合(integrate)する人間教育…

現代における大学教育は、いわゆる「実学」に軸足を置く傾向が顕著なために、専門分野においても細分化、個別化が加速し、トータルな視点から事柄を捉える「総合力」が弱体化しつつあると言わざるを得ない。本コースでは、「主体的に生きる人間」の視点からもう一度、相互の関連性を「統合」し、学生がグローバル化した現代社会にあってより良く生きるための知見、判断力、コミュニケー

ション能力等を身に付けさせることにある。

3)「生きる意味」を創出するための人間教育…

今日、大学教育に期待されていることは、習得された専門的知識・技術を新しい価値の創造へと展開させることにある。現代社会を蝕む信頼の喪失、様々な社会問題が多発する中で、現代人の「目的意識の欠如」「生きる意味の喪失」が指摘されている

が、大学高等教育においてこそ、習得された知識や技術を何のために、また、いかに用いるかが問われなければならない。本コースにおいて、学生が自らの「生きる意味」を見出し、社会に巣立っていった欲しいと願う。以上が中間報告です。

いずれこの続きはまたの機会に！！

No.372 2020.2.4

## “「キリスト教人間学インスティテュート」設置に向けて(その2)”

昨年No.360号で2022年の大学関内キャンパス開設に併せて「キリスト教人間学コース」設置の趣旨を説明しましたが、本号では、その後の進捗状況をお伝えして、さらなるご理解を得たいと願っています。

内容に入る前に、以前までの「人間学コース」との呼称を「インスティテュート」と名称変更した理由について、少し述べさせていただきます。それは、数多くある「コース」の一つという域を超えて、すべての学部学生を対象として行う「キリスト教に基づく教育」プログラムゆえに「インスティテュート」と銘打った方が相応しいと判断したからです。今後はこの呼び名を使いますので、どうぞお見知りおきください。

次に、本「インスティテュート」のコンセプト及び教育の概要について説明いたします。コンセプトについては前号で既にお知らせした通りですが、大切な事柄ゆえにポイントだけ繰り返します。趣旨は「キリスト教思想及び倫理観を土台に据えた人格形成を目指す体系的カリキュラムを提示することによって、人間として自立するための総合力を身に付け、現代社会において責任をもって主体的に生きていくための人間力を養い育てようとするところにある」と謳い、その特色として以下の3点を挙げています。①校訓「人になれ 奉仕せよ」の内実化を目指す人間教育、②専門的知識を統合(integrate)する人間教育、③「生きる意味」を創出するための人間教育、を目指します。

以上の事柄を踏まえて、「インスティテュート」の教育概要について言えば、「各学部に置かれた科目群のうちで指定された一部の科目を含む、全体で15科目30単位からなるカリキュラム構成」を考えています。具体的に言えば、次の4つの科目群に分類できると思

います。1)一年次必修科目…キリスト教学(2単位)、2)コア科目(必修4コマ、8単位)…キリスト教人間学1、キリスト教人間学2、キリスト教平和学、宗教学、3)キリスト教関連科目(選択5コマ、10単位)既存の各学部開講のキリスト教関連科目及びインスティテュート提供科目…「キリスト教平和学」に基づくフィールドワーク科目(沖縄平和研究、長崎・五島キリシタン研究)、メディカル・パストラル・ケア等がある。4)一般教養科目(選択、5コマ、10単位)キリスト教関連科目ではないが、それと密接に関わる科目で各学部設置の一般教養科目の中からインスティテュート指定の科目を履修する、としています。

上記の15科目30単位を修了した学生には、本インスティテュートの「修了認定証」を授与します。「宗教文化士」の資格取得も可能になり、その資格取得によって専門分野での就職の道が広がります。

また、インスティテュートの提供科目は基本的には金沢八景キャンパスに修学する学生が履修可能な形態を採ってはいますが、出来得る限り、関内キャンパスで学ぶ学生にも門戸を開き、受講出来るような道を模索している段階であると申し上げておきます。

以上が2022年4月、関内キャンパス開設と共にスタートしたいと願っている「キリスト教人間学インスティテュート」のねらいと科目概要(案)です。現在「神学部設置検討委員会」は最終的な詰め段階に入っています。来年度は直接、皆様に説明させて頂き、ご理解を得たいと願っています。キリスト教に基づく教育を標榜する関東学院大学が名実共にキリスト教教育を内実化させようとする、このインスティテュート立ち上げの計画にご支援とご協力をお願い致します。

No.386 2020.9.15

## “「キリスト教人間学インスティテュート」設置を前にして(その3)”

大学の未来ビジョンのプロジェクトとして五年越しで検討してきた「キリスト教人間学インスティテュート」設置への取り組みもいよいよ正念場を迎えました。2022年4月開設を目処にコンセプト及びシラバスの作成、修了要件、コア科目、履修単位の特定など、7月末までに概要を取りまとめることができました。そして、秋学期開始直後の学部長会議で賛同を得るべく、9月初旬から中旬にかけ、学部担当チャプレンと学院長が学部長を個別にお尋ねして趣旨を説明し、ご理解とご協力を得たいと願い、3分の2以上の先生方との面談を終えることができました。現段階で感じますことは、予想していた以上に、学部長方から賛同と激励の言葉を頂き、長い間、潜在的に期待され、必要性が叫ばれてきた本来のキリスト教学校としての「大学のあるべき姿」がこれによって顕在化する契機となり得るのではないかとの思いを抱き、意を強くしている処です。

ここで、諸先生方が賛意を示してくださった言葉のいくつかを紹介してみましょう。●「コロナ禍の時代において、すべての事柄が不透明で先が読めない時代であって、キリスト教の普遍的な価値観、ものの見方、人間観を学生たちに提供することは極めて有益なことではないか」。●「現代日本において、即効的な適用を追求する実学中心の大学教育が多数を占める中で、自らの生き方や生きる意味、あるいは、自分自身のアイデンティティを考えさせる教育こそ、いま求められているのではないか」。●「わが大学が今後10年、20年、存在感を示しながら生き延びていくためにキリスト教に基づく教育の内実化が必須であるとすれば、本インスティテュートの謳う趣旨、方向性は大変時宜を得たものになるに違いないと期待している」等々。様々な

分野においてパラダイム転換が求められ、思考の枠組み、ライフスタイルさえも大きく変わろうとしている時代の只中であって、今後の大学教育の志向すべき在り方が問われているように思えて仕方ありませんでした。

先日、大学の情勢に詳しい方とお話した際、その方は、ここ数年間で、日本の大学は二極化が加速的に進むだろうと予測しておられました。そうした中で、持続可能な形態を維持して生き延びる大学は、建学の精神、教育理念を明確に提示しつつ特色ある教育を目指すと共に、変化の激しい時代状況を見据えて、しなやかに対応する術を心得ている大学であると語っておられました。

わたしは、この話を聞いて、今こそ我が大学も本インスティテュート設置によって、新たな歩みへと踏み出す時に来ているのではないかと感じています。本インスティテュートは、本学の教育理念である「キリスト教に基づく教育」をさらに深め内実化させようとする教育プログラムであり、目指すは学部附置カリキュラムに加え、全学共通科目(コア科目)を提供し、学生たちが人間として自立するための総合力を身に付け、現代社会において責任ある主体として生きるための「人間力」を養い育てようとする処にあります。

どうか皆さん、変わりゆく時代にあって、学生一人ひとりが、自らが拠って立つ「生の基盤」を見出して、しなやかに、かつ、逞しく生きていくことを手助けする教育プログラムに一層のご理解とご協力を賜るよう、お願い致します。

チャプレン及び宗教教育センターのスタッフ一同は、今後も本インスティテュート開設に向けて準備して参りますので宜しくお願いします。

# 中学関東学院における「福音的キリスト教」の一断面 —内村鑑三・高倉徳太郎 等をめぐって— (一)

関東学院 学院長付(学院史資料担当) 渡邊 茂

## 「中学関東学院 卒業礼拝式」(1926年3月)における 説教者としての高倉徳太郎

今年2022年には、高倉徳太郎の主著となる『福音的基督教』刊行(1927年10月)から「95年」を迎えます。内村鑑三と比べて、高倉徳太郎の一般的知名度は必ずしも高くはないものの、日本プロテスタント・キリスト教神学思想史において極めて重要な人物であることは確かです。

今日の関東学院「第三の源流」としての「中学関東学院」において、(卒業式前日の)1926(大正15)年3月7日(日)午後「卒業禮拜式説教」を担当したのは「東京神學社神學校長 高倉徳太郎氏」でした(「卒業式御案内」、『基督教報』第829号、1926年2月26日、8頁 ※『基督教報』は当時週刊[毎月四回発行]のバプテスト教会機関紙[第834号以降は毎月二回発行])。

その説教当日の高倉徳太郎自身の日記には、極めて簡潔に次のように記されています。《横浜の関東学院に於いて卒業説教をなす。》(秋山憲兄編『高倉徳太郎日記』新教出版社、2014年、296頁)と。因みに「高倉徳太郎」は、『広辞苑』第七版(岩波書店、2018年)や、『世界大百科事典』第17卷(平凡社、2006年改訂版)においても「見出し語」として掲載されています。

その高倉徳太郎の業績について『世界大百科事典』では(組織神学者の近藤勝彦氏により)「代表的なプロテスタント神学者…教会と神学の伝統の未熟な日本にあって、ヨーロッパの神学を咀嚼しながら、神学的思惟を確立…『福音的基督教』(1927)によって、罪と恩寵を強調する贖罪的神学を展開し、あわせて聖書的、福音的説教による教会形成の道を開拓した」(同上、186頁)と記されています。

内村鑑三門下の旧約聖書学者(日本旧約学会会長)として、「岩波文庫」における個人訳でも著名な関根正雄は、その高倉徳太郎と内村鑑三とについて、例えば次のように述べています。《エピソードですが…学生連合礼拝の第一回…あの時内村先生が高倉先生と講壇を、ともにされましたね。あの時…前の日に今井館の庭を内村先生は「大丈夫だ、大丈夫だ」と言って歩いていたのだそうですね。…内村先生は自らを励ましていると言われたそうです。内村先生は一面非常に弱くて、

あの時は…文章に書いていたものを読んでおられる。…あれはやっぱり一面不安だったのではないのでしょうか。ことに高倉先生と一緒に話をしなければならなかったわけですから。》(『シンポジウム・キリスト教教育史における群像』、キリスト教学校教育同盟編『日本キリスト教教育史・人物編』創文社、1977年、48頁)と。

因みに、1925年6月6日(土)に開催された「学生連合礼拝」(東京市内外学生大連合礼拝、於青山会館)において、「基督教と文明の精神」と題し講演した高倉徳太郎の当日の日記には、次のように記されています。《三千人以上集りたらん。之れ又感謝 一内村氏の話も可なり。dogmaticなけれども、ところどころ天才のひらめきあるを覚ゆるなり。》(前掲『高倉徳太郎日記』、247頁)と。

他方、同日の内村鑑三の日記(月刊雑誌『聖書之研究』に掲載された)には、次のように記されていました。《来会者三千五百人と註せられた。自分も説教を依頼され、東京神学社校長の高倉徳太郎君と高壇を共にした。自分は「日本国と基督教」と題して講じた。久振りにて市内の聴衆に語ることで随分骨が折れた。》(『内村鑑三全集』第34卷[日記二]、岩波書店、1983年、447頁)と。

この1925(大正14)年には、ラウシェンブッシュ著『社会的福音の神学』(友井慎訳)も刊行されています(「社会的福音の神学」、『基督教報』第795号、1925年6月5日、7頁)。なお、関東学院大学図書館所蔵の『社会的福音の神学』(日本基督教興文協會、1925年)初版本には、「坂田院長先生寄贈」と記されています。

また、近代日本における「旧約聖書」に関して、関根正雄は次のようにも述べていました。《明治以来の日本のキリスト教界の先輩の中で、聖書の權威の確立の為にその生涯を賭した第一人者はなんといっても内村先生であるが、殊に旧約聖書を信仰の本質にかかわらせつつ、新約聖書と同じ權威を持つものとして読み、かつ人々に強く訴えたのは 一時代的に少し遅れる高倉徳太郎氏を除いて 殆んど数える程しかいないのではあるまいか。》(関根正雄著『内村先生と旧約』、教文館編『現代に生きる内村鑑三』、1966年、147頁)と。

「聖書的、福音的説教による教会形成の道を開拓し

た」高倉徳太郎が、「無教会」のプロテスタント・キリスト者である関根正雄によって、「内村先生」(内村鑑三)と同等に評価されていることにも着目しておきたく存じます。

なお「関東学院院長」であった坂田祐著「内村鑑三の思い出」も掲載されている、この『現代に生きる内村鑑三』初版本(「坂田蔵書」の角印が押印されたもの)は、関東学院大学図書館本館「学院史コーナー」開架書架に在ります。

その坂田祐は「わたしの生涯に於て、わたしにとって最も重大なことは、わたしが一高在学中に、内村鑑三先生の弟子となったことである。」(坂田祐著『新編 恩寵の生涯』復刻版[新装刊行]、学校法人関東学院、2018年、74頁)と確言していました。

内村鑑三と坂田祐との深交については、例えば、鈴木範久著『内村鑑三の人と思想』(岩波書店、2012年、172-174頁)や、同著『内村鑑三交流事典』(ちくま学芸文庫、2020年、192-193頁)等にも記されています。

鈴木範久著『近代日本のバイブル―内村鑑三の「後世への最大遺物」はどのように読まれてきたか』(教文館、2011年)には、『酒枝義旗の主宰する待晨集の雑誌で…毎月刊行…『待晨』に掲載された記事のなかで、いまだに忘れないものが坂田祐による「恩寵の生涯」と題された連載で…初回は一九五五(昭和三十)年一〇月一〇日の第六三号ですから、私はまだ一九歳でした。』(同上、79-80頁)という著者の個人的回想も記されています。

#### 「東部バプテスト教役者修養会」(1925年2月)における講演会講師としての高倉徳太郎

今日の関東学院「第二の源流」としての「東京学院」を主な会場として、当時の「東京学院長」(後に関東学院長にも就任する)「神学博士」千葉勇五郎も講師を務める「東部バプテスト教役者修養会」が、1925(大正14)年2月8日(日)より14日(土)までの一週間に亘り開催されます(「東部バプテスト教役者修養会」、『基督教報』第776号、1925年1月16日、7頁)。そして、次のように案内されていました(一部分抜粋で引用)。

《其の假プログラムは大體左の通りであります。(…)  
一、修養會禮拜 二月八日(日)午後二時(…)  
二、講演會 二月九日(月)―十四日(土)毎午前九時―十二時

左の諸講演がある筈であります。何れも二時間の講演であります。

「バプテストの開拓者」東京学院教授 ホルトム博士

「バプテストの主義」東京学院長 千葉博士

「現代聖書観」東京学院教授 澤野良一氏

「現代社會思想」東京学院教師 竹中勝男氏

「現代教役者と其の事業」靈南坂教會牧師 小崎弘道氏

「山上の垂訓の宗教及倫理訓」日本メソヂスト監督 鵜崎庚午郎氏

「舊約の問題」東京女子大學教授 渡邊善太氏

「基督論」東京神學社教授 高倉徳太郎氏

「パウロの宗教的經驗と其の贖罪觀」内村鑑三氏(同上、7頁)と。なお、上記引用文中の「日本メソヂスト監督 鵜崎庚午郎氏」は、関東学院六浦小学校の鵜崎寿教諭の曾祖父にあたります。

1925(大正14)年2月12日(木)の内村鑑三の日記には、次のように記されています。《日本バプテスト教会教役者修養会の依頼に応じ、…「余の觀たる使徒パウロ」に就て…高壇に立つた。…教会全体に嫌はるゝ、自分に取りては、教会の招きに応ぜしことは十数年来初めての事であつて、奇異の感を免かれなかつた。》(前掲『内村鑑三全集』第34卷[日記二]、406頁)と。

『高倉全集』第10卷[日記・書翰](高倉全集刊行會、1937年)掲載「高倉徳太郎年譜」には「大正十四年(一九二五年)四十一歳」の「二月十四日(土)」の出来事として、極めて簡潔に次のように記されています。《東京學院において「基督論」を語る。》(同上、12頁)と。

後日発行の『基督教報』における「教況」欄には、次のように報告されています(一部分抜粋で引用)。

《二月(…)十一日(…)坂田祐氏は米國旅行中の話などせらる。(…)十二日は近代バプテストの主義と題する千葉氏の講演あり。英國などにては、バプテストは教會の問題とするよりも、個人の自由意志に重きを置くとのお話あり。引續き塚本[虎二]氏は、聖書の語學に付き有益なる講演をせられ、内村鑑三氏は予がパウロ觀と題し、パウロの性質に付き極めて面白く説明せられた。會衆凡そ百名。(…)午後二時よりの渡邊善太氏の「舊約の諸問題」はお手のものにて頗る有益であつた。(…)十三日朝は千葉博士の。米國バプテストの思想新傾向に關する講演あり。モダンニストの色彩明白であつた。(…)十四日午前九時より、高倉徳太郎氏の「基督論」あり二時間に亘り、内容充實信仰の熱に燃えたる極めて有力の講演であつた。》(「修養會」、『基督教報』第781号、1925年2月20日、6頁 ※[ ]内は引用に際し補筆、以下同様)と。

〔本稿の続き(二)は、次号へ掲載〕

## ◆寄贈資料の紹介◆

2021年7月、友井楨先生のご遺族、ご協力の方々から大変貴重な写真や資料をご寄贈いただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。ご寄贈品については現在詳細を確認中ですが、いずれ資料展等で展示をさせていただく予定です。



大正3年7月1日 渡米前

### 友井 楨（ともい こうすえ）1889-1962

日本バプテスト神学校卒業後、神戸の教会で副牧師として伝道の後、留学のためアメリカに渡りロチェスター神学校等に5年間学び1919（大正8）年帰国。ロチェスターでは社会的福音の主唱者W.ラウシェンブッシュの感化を受けた。

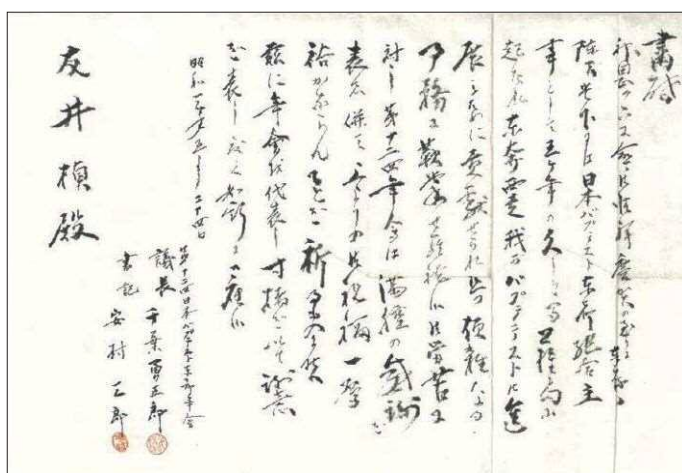
帰国後、神戸、川崎、浪速の教会を牧し、4年6ヵ月の間、関東大震災後の最も困難な時期に日本バプテスト東部組合の主事を務め、教会、学校、施設の救護と再建に尽力した。

1927（昭和2）年関東学院に招かれ、神学部教授に就任。

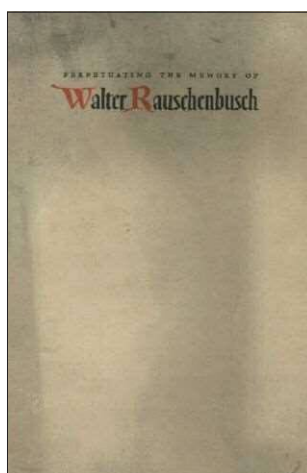
W.ラウシェンブッシュの「キリスト教は社会の救済に積極的に関わるべきである」という影響を受け、関東学院高等部社会事業科主任を兼務し、1930（昭和5）年関東学院セツルメントを設立して労働者の啓蒙につとめた。

日本基督教団成立の推進者のひとりとして書記をつとめ1946（昭和21）年からは5年6ヵ月にもわたって総主事の重責を担った。晩年は四谷新生教会の建設と牧会に当たった。

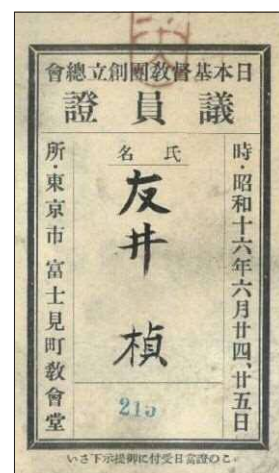
現行『讃美歌』の400番、439番の作詞者である。



『肅啓』1928（昭和3）年5月24日、第12回日本バプテスト東部年会に於いて、議長である千葉五郎と書記である安村三郎から、友井が約5年間主事として貢献した事に対する感謝の意を表したもの



ロチェスター神学校  
W.ラウシェンブッシュの本



日本基督教団創立総会  
議員証

## ◆学院史資料・情報提供のお願い

卒業生、修了生、元教職員の皆さまに学院に関係する資料・情報の寄贈をお願いしております。

近年はデジタルアーカイブ構築のため、データを収集する目的で皆さまより資料をお借りして電子データを作成し、データ登録する業務も行っております。お借りした資料は処理が終わりましたら返却させていただきます。

お手元にあります学生時代のお写真や学院のパフレット、式典、学祭の配布物など、大切な記録かと思いますが、学院史資料の収集にご協力いただけますよう、お願いいたします。資料のご提供については以下にご連絡ください。

Tel:045-786-7066, E-mail:archives@kanto-gakuin.ac.jp 学院史資料室事務室

## 編集後記

関東学院は2034年に創立150周年を迎えます。今号はメインテーマとして、これまで学院、学院史に深く関わってきた方々にご自身の経験を踏まえながら、来たる創立150周年に向けて思う事やお考え等を語っていただくことにいたしました。このテーマについては創立150周年まで続けていく予定です。次号以降もご期待ください。

### ◆学院史資料等、ご返却のお願い◆

以前に当資料室や坂田記念館から研究等のご利用目的で貸し出しました資料のうち、未だご返却いただけていないものが多数ございます。もしもお手元にありましたらご返却をお願いいたします。

学院史資料室事務室室長 田中宏治

## KANTO GAKUIN Archives

### 関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第25号

発行日 2022（令和4）年3月1日

発行人 関東学院 学院長 松田 和憲

編集 『関東学院学院史資料室ニュース・レター』編集委員会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL.045-786-7066 FAX.045-786-2932